

知識基盤社会を主体的に生き抜く資質・能力と教育課程

－上越教育大学附属中学校の研究開発を中心に－

小 出 信 也*・濁 川 朋 也*・中 野 博 史*・釜 田 聡**

(平成28年2月29日受付；平成28年6月7日受理)

要 旨

本研究は、上越教育大学附属中学校の教育課程の研究開発の歩みを研究主題設定の経緯、「資質・能力（目ざす生徒の姿、人間像等）」と教育課程の構造、評価方法の視点から整理し、考察することで、上越教育大学附属中学校における教育課程の研究開発の特質を導出することを研究の目的とする。

研究の結果、次の3点を上越教育大学附属中学校の研究開発の特質として導出することができた。

- 1 研究課題は、時代や社会の要請、学習指導要領、生徒の実態、前研究の成果と課題を受けて、設定している。
- 2 「資質・能力（目ざす生徒の姿・人間像）」は、研究課題との関係で、明確に示している場合と目ざす生徒の姿・人間像に包含される形で示されている。
- 3 研究期間は、教育課程の生成期・開発期と実践・充実期のサイクルで研究開発が行われている。

今後の研究課題として、「資質・能力（目ざす生徒の姿、人間像等）」と各教科、教育課程全体の評価方法の開発について研究の余地があることが挙げられた。

KEY WORDS

| | |
|--------|-------------------------|
| 知識基盤社会 | Knowledge-based society |
| 資質・能力 | Qualities and abilities |
| 教育課程 | Curriculum |

1 はじめに

本研究課題設定の背景は、現在の日本の教育の潮流と上越教育大学附属中学校の研究開発の系譜である。以下、順に説明する。

1. 1 現在の日本の教育の潮流

今、日本の教育界では、「育成すべき資質・能力」が注目されている。これは、1997年にOECDがスタートしたDeSeCo（コンピテンシーの定義と選択）が契機になり、キー・コンピテンシーをはじめ、育成すべき資質・能力を明確化した上で、その育成に必要な教育の在り方を考える潮流に位置付くものである¹⁾。関連するものとして、アメリカを中心とした「21世紀型スキル」、英国の「キー・スキルと思考スキル」、オーストラリアの「汎用的能力」などが挙げられる。なお、日本においては、「生きる力」が提唱され、OECDのキー・コンピテンシーとも重なるものであるが、「生きる力」を構成する具体的な資質・能力の具体化や、それらと各教科等の教育目標・内容の関係についての分析がこれまで十分でなく、学習指導要領の構造を、育成すべき資質・能力を起点として改めて見直し、改善を図ることが必要であると指摘されている²⁾。こうした教育の潮流の中で、現在、新しい学習指導要領の在り方が検討されている。例えば、次のような指摘がある。「学習指導要領の構造を、育成すべき資質・能力を起点としたものに改めたとしても、それが、各学校の教育目標と明確な関係を持つ教育課程として編成され、各教員が理解し、適切に実践することなしには効果が上がらない³⁾」。つまり、カリキュラム・マネジメントの確立が喫緊の教育課題となっているのである。

教育実践研究の視座からは、教育課程の開発・評価を包含した教育課程の創造・開発が急務といえる。一方で、中学校段階で、こうした実践的な教育課程開発研究を継続している例は管見する限り見られない。そうした中で、上越教育大学附属中学校は注目すべき教育課程の開発研究を継続的に行っている。上越教育大学附属中学校は、1992年から教育課程研究、1995年から教育課程の開発研究に取り組み、今日に至っている。その間、三回にわたって文部科学

*上越教育大学附属中学校 **学校教育学系

省の研究開発校の指定を受け、実践的・開発的な教育課程研究を推進してきている。

1. 2 上越教育大学附属中学校の教育課程の開発の経緯

上越教育大学附属中学校は、1980年代から各教科等の研究とさらに道徳、特別活動の研究を射程に入れた教育実践研究を進めていた。1990年代になると文部科学省指定のコンピュータの活用に関する研究指定を受けた。この研究では、すべての教育活動において、探究的な教育活動にコンピュータを位置付けるという当時としては画期的な教育実践研究を行った。その後、こうした研究成果を継承した上で、1992年教育課程研究を開始し、内発的動機付けと時代や社会の要請を受けた教育課程研究の基礎固めを行った。以下、簡単に教育課程研究の系譜を概観する。

1995年度、「21世紀の教育課程の開発」と研究主題を設定し、21世紀の人間像を提示した。教育課程の中に、総合学習「グローバルセミナー」、選択学習「桜城セミナー」を位置付け、21世紀の人間像に迫った。2002年度の研究からは、「未来ゼミ」「大教科」を中核とした教育課程の創世・開発を行った。2007年度からはPISA型学力などの国際的学力の伸長を射程に入れた教育課程の開発を試みた。2013年度からは、知識基盤社会・グローバル化社会に対応した教育課程の生成、開発を目ざして今日に至っている。とりわけ、2011年度総務省「フューチャースクール推進事業」及び文部科学省「学びのイノベーション事業」の実証校となったこと、新設科目として「持続発展科」を教育課程に位置付けたことは特筆すべき取組といえる。

1. 3 先行研究

1. 3. 1 上越教育大学附属中学校の研究

上越教育大学附属中学校自身による研究の公表は、主に三つに分類できる。一つ目は毎年の研究協議会に合わせて発行される研究紀要である。二つ目は研究の節目節目に発行される研究出版物である。三つ目は附属中学校教員が大学教員等と連携し発刊する研究出版物等である。しかし、いずれも、単年度の研究成果や各教科等で取組を公表したものであり、上越教育大学附属中学校の教育課程開発の経緯を俯瞰した研究は管見する限り見られない。

1. 3. 2 研究者等の研究

研究者が特定の課題意識に基づき上越教育大学附属中学校の教育実践を研究対象とすることがある。例えば、釜田(2005)は、総合学習「グローバルセミナー」の生成過程を質問紙調査等で検討し教育課程開発の視点を導出している。また、釜田(2008)は、総合学習「グローバルセミナー」の生成過程を研究紀要や各種文献から抽出整理し、教育課程開発の視点を導出している。しかし、いずれも総合学習「グローバルセミナー」の生成過程に焦点を当てた研究であり、「資質・能力」の育成に焦点化した研究は管見する限り見られない。

以上のことを踏まえ、本研究では、「知識基盤社会を主体的に生き抜く資質・能力と教育課程－上越教育大学附属中学校の研究開発を中心に－」と研究題目を設定し、以下の研究構想(目的と方法)を立案した。

2 研究の目的と方法

2. 1 研究の目的と意義

育成すべき「資質・能力」と教育課程の関係について、上越教育大学附属中学校の実践研究上の意義を浮き彫りにする。中学校の教育研究(他附属を含め)で、長期にわたって教育課程の開発研究を行っている学校はない。このことから、上越教育大学附属中学校の教育課程の研究開発は先駆的な実践研究として再評価すべきである。

そこで、本研究では、上越教育大学附属中学校の教育課程の研究開発の歩みを、研究主題設定の経緯、「資質・能力(目ざす生徒の姿、人間像等)」と教育課程の構造、評価方法の視点から整理し考察することで、上越教育大学附属中学校における教育課程開発の特質を導出することを研究の目的とする。

2. 2 研究の方法

最初に、1995年から2015年までの研究紀要、研究出版物、関連する先行研究を手掛かりに教育課程の開発の経緯を「総合学習」の変遷を基軸に概観し特徴を抽出する。次に、研究主題、研究主題設定の理由、育成すべき資質・能力をどのようにとらえているかを抽出し、時系列に分類整理する。続いて、育成すべき資質・能力をはぐくむため、教育課程上でどのような工夫をしているかを抽出し考察する。最後に、現在取り組んでいる研究開発の実践と見通しを踏まえ、育成すべき資質・能力と教育課程の関係を展望することで、本研究の目的に迫る。

3 研究の結果と考察

3. 1 上越教育大学附属中学校の教育課程開発研究の足跡と特質

1995年から2015年までの教育課程の開発の経緯を「総合学習」の変遷を基軸に概観した結果、次の四つの時期に分けることができた。

第1期 総合学習「グローバルセミナー」を中心にした教育課程開発期（1995年－1998年）・充実期（1999年－2001年）

第2期 「未来ゼミ」・「大教科」を中核とした教育課程生成期（2002年－2003年）・開発期（2004年－2006年）

第3期 国際的学力を射程に入れた教育課程生成期（2007年－2009年）・開発期（2010年－2012年）

第4期 知識基盤社会・グローバル化社会に対応した教育課程生成期（2013年－2015年）・開発期（2015年－2018年）

以上の四つの時期ごとに、育成すべき資質・能力と教育課程の関係を中心に、1 研究主題、2 研究主題設定の理由、3 育成すべき資質・能力、4 教育課程の構造、5 研究評価を抽出・整理する。その上で、育成すべき資質・能力をどのように設定し、どのような教育課程を生成・開発しようとしたかを抽出・整理する。最後に、教育課程の研究評価を抽出・整理し考察する。以下、四つの期ごとに2. 2の研究方法に即して、研究の結果と考察を示す。

3. 1. 1 第1期

表1 総合学習「グローバルセミナー」を中心にした教育課程開発期（1995年－1998年）・充実期（1999年－2001年）

| | |
|---------------------------|--|
| 1 研究主題 | 教育活動のネットワーク化を求めて－21世紀の教育課程の開発－ |
| 2 研究主題設定の理由（背景） | (1)地球の乗組員として (2)時代や社会の要請 (3)生徒の実態 (4)これまでの研究経緯 |
| 3 育成すべき資質・能力（目ざす生徒の姿・人間像） | 21世紀の人間像(1)広い視野と行動力をもった人間、(2)自分のよさや可能性を信じ、その達成に向け努力しようとする人間、(3)自立的に生きる人間、(4)共生の心をもつ人間、(5)みずみずしい感性と情操をもつ人間 |
| 4 教育課程の構造 | 「めざす生徒の姿」を観点とした各教科等の学習内容の関連・統合化をはかる。 総合学習「グローバルセミナー」と選択学習「桜城セミナー」 |
| 5 研究評価 | 「資質・能力」の評価については、各教科等で行われた。教育課程全体では計画的には行われていない。グローバルセミナー国際理解では、毎年の実践を通じて「はぐくみたいこと」を再検討している。同時に、単元構想や教育課程、各教科等との関連、保護者や地域との連携などを評価対象としている。 |
| 1 研究主題 | 自らの学びを総合化する生徒の育成 |
| 2 研究主題設定の理由（背景） | (1)時代や社会の要請から (2)前研究とのかかわりから (3)当校の生徒の様子から (4)教師の願いから |
| 3 育成すべき資質・能力（目ざす生徒の姿・人間像） | 学びを総合化する生徒（学びが総合化されたときの生徒の姿） (1)物事から様々なことを感じ取る豊かな感性をもつ生徒 (2)自分自身を取り巻く様々な環境と自分との関係を多面的に考え、そこにある問題点の解決に向けて取り組む生徒 (3)自分の考えや思いを豊かに自己表現できる生徒 (4)自らの取組を振り返り、先の見通しをもちながら、その後の学習に意欲的に取り組んでいこうとする生徒 (5)学んだことをできるだけ、学校生活、家庭生活、社会生活などのいろいろな生活の場面で生かしていこうとする意欲や態度をもつ生徒 これらの各側面は密接な関係をもち、生徒が出会う様々な場面において、これらの各側面が一体となって活用されたときに学びの総合化が図られたとらえている。 |
| 4 教育課程の構造 | グローバルセミナー 選択学習 |
| 5 研究評価 | 「資質・能力」（自らの学びを総合化する生徒）に迫っているかどうかは、グローバルセミナーや各教科等での取組、共通抽出生の変容、保護者の意見をもとに考察し、研究の評価を行った。例えば、共通抽出生のB男についての評価は、定期考査の成績と日常の授業の様子、道徳、特別活動、音楽、グローバルセミナーでの評価情報を集積し、B男が自らの学びを総合化しているかを確認した。B男もよりよく生きようとする学習意欲や態度が高まってきたと判断している。 |

（釜田作成）

1995－1998年の研究期は、21世紀の人間像を設定した。その人間像が包含する資質・能力を抽出すると、広い視野と行動力、自己肯定感、勤勉性・粘り強さ、自立、共生の心、感性と情操を挙げるができる。この資質・能力を育成するため、総合学習「グローバルセミナー」と選択学習「桜城セミナー」を教育課程に位置付け、各教科等との関連を図った。なお、資質・能力の評価は各教科等と「グローバルセミナー」、「桜城セミナー」等、それぞれの場で評価を行った。それらを集約し分析・検討することで、資質・能力がはぐくまれているかを判断している。

1999年－2001年の研究期は、「学びを総合化する生徒」を設定した。その生徒像が包含する資質・能力を抽出する

と、(1)豊かな感性、(2)環境との関係性把握と実践力、(3)豊かな自己表現力、(4)自己評価能力と自己肯定感、(5)活用力の5点を挙げることができる。この資質・能力をはぐくむため、各教科等と「グローバルセミナー」「選択学習」相互に関連を図った。資質・能力の評価については、共通の抽出生徒を設定し、各教科等、「グローバルセミナー」、
「選択学習」等で行い、その成果を判断した。

3. 1. 2 第2期

表2 「未来ゼミ」・「大教科」を中核とした教育課程生成期（2002年－2003年）・開発期（2004年－2006年）

| | |
|---------------------------|--|
| 1 研究主題 | 自分を知り、世界とのかかわりを深める教育の創造 |
| 2 研究主題設定の理由（背景） | (1)社会の要請 (2)前研究の成果や課題 (3)私たちの思い (4)生徒の学びや活動の様子 |
| 3 育成すべき資質・能力（目ざす生徒の姿・人間像） | はぐくみたい学力 (1)生命の尊さや自分のよさを知り、社会や集団の一員として自分のよさを進んで伸ばし、生かそうとする意欲や態度 (2)心身に関する課題や地球的規模の課題に目を向け、その改善に向けてできることを見だし、行動しようとする意欲や態度 (3)体験活動などを通して、心身に関する課題や地球的規模の課題を発見し、必要な情報を集め取捨選択しながら、多面的・多角的に考える力。 (4)追究の成果や自分の考えを分かりやすく表現し、互いの意見を尊重しながらよりよい考えを練り上げる力。 (5)心身そのものや心身と密接にかかわる問題、世界の現状や地球的規模の課題を正しく認識するために必要な知識や技能。 (6)いろいろな事象から様々なものを感じ取ったり、柔軟に受け止めたりする豊かな感性や情操。 |
| 4 教育課程の構造 | 情報の時間、未来ゼミ、総合社会科、科学技術科、生活健康科、情報活用科、表現創造科、英語科、国語科、数学科、人生ゼミ、選択教科 |
| 5 研究評価 | 「はぐくみたい学力」がはぐくまれているかを、教科の学び、未来ゼミでの学び、生徒の意識調査、保護者によるアンケート調査、人生ゼミの振り返り用紙の評価情報を集積・確認し、教育課程全体として評価を行った。 |
| 1 研究主題 | 総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した新たな教育課程の研究開発 －切実感を高めながら学び続ける生徒の育成－（文部科学省研究開発学校） |
| 2 研究主題設定の理由（背景） | (1)時代や社会の要請 自ら学ぶ生徒 (2)研究経緯 グローバルセミナー 未来ゼミ 大教科 (3)総合的な学習の時間と教科の一体化－総合的な学習の時間が教育課程全体の骨格をなすものにする必要－ |
| 3 育成すべき資質・能力（目ざす生徒の姿・人間像） | 大事にしたい学力、「切実感を高めながら学び続ける生徒」の育成 (1)教科の学びと自分の生活との結び付き・・・切実感 (2)教科の学びそのもののおもしろさ・・・切実感 (3)確かな学力 知識や技能に加え、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力 |
| 4 教育課程の構造 | 総合社会科、科学技術科、生活健康科、情報活用科、表現創造科、英語科、国語科、数学科、人生ゼミ、選択教科 |
| 5 研究評価 | 「再編8教科」の有効性を、「切実感を高めながら学び続ける生徒」の育成につながっているかの視点で評価を行った。対象と方法は、全校生徒へのアンケート調査、保護者を対象としたアンケート調査、再編8教科（目標、教材、大事にしたい学力、評価規準、学習内容）の単元評価計画や調査問題作成・実施、授業公開（研究開発運営指導委員）、標準学力検査（CRT）を手掛かりとして行った。 |

（釜田作成）

2002年－2003年の研究期は、はぐくみたい学力を6つ設定した。一つ一つに複数の資質・能力が包含されているが、他の研究期との整合性を勘案し、次のように資質・能力を抽出した。生命の尊さの認識、自己理解、社会との関係（社会性）、健康と地球的規模の課題への興味・関心と実践的態度、健康と地球的規模の問題に対し多面的多角的に探究する力、思考力、共同的对話、健康と世界の現状・地球的規模の問題についての認識とそのための技能、感性。健康と地球的規模の課題に対しては重複する箇所が見られるが、基本的に身の回りやグローバルな事象に対する認識面と認識するための感性と感情、方法が挙げられていることが確認できる。教育課程の構造として、「未来ゼミ」と「人生ゼミ」を設定し、健康面とグローバルな課題に対応するため、「総合社会」や「科学技術科」などの広領域教科を設定している。研究評価については、「はぐくみたい学力」を教科の学びや「未来ゼミ」での学び、生徒の意識調査、保護者によるアンケート調査などの評価情報を集積・確認し、教育課程全体の評価としている。

2004年－2006年の研究期は、「切実感を高めながら学び続ける生徒」の育成と目ざす生徒像を設定し、大事にしたい学力として、教科の学びと自分の生活との結び付きと学ぶことそのものに切実感をもたせ、その上で、確かな学力を挙げている。また、確かな学力については、「知識や技能に加え、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」と規定している。教育課程の構造は、「総合社会科」や「科学技

術科」など8教科に再編して、目ざす生徒像に迫った。研究評価は、「再編8教科」が「切実感を高めながら学び続ける生徒」の育成につながったかという視点で評価を行った。全校生徒へのアンケート調査、保護者を対象としたアンケート調査、再編8教科、標準学力検査を手掛かりとして多面的・多角的に評価情報を収集し、その有効性を検証している。特に、再編8教科と目ざす生徒の姿との関係については研究開発校の趣旨からも厳格に行っていることに注目したい。

3. 1. 3 第3期

表3 国際的学力を射程に入れた教育課程生成期（2007年－2009年）・開発期（2010年－2012年）

| | |
|---------------------------|--|
| 1 研究主題 | 社会に広がる学びの創造－活用力と社会性をはぐくむ学びの過程に着目して－ |
| 2 研究主題設定の理由（背景） | (1)社会が求めている教育の方向性から 2003年PISA 学習指導要領改訂の動向 (2)当校生徒の実態 (3)当校の研究経緯と課題から |
| 3 育成すべき資質・能力(目ざす生徒の姿・人間像) | 【大事にしたい学力】 社会に広がる学びの創造 活用力 社会性 活用力の段階：認知・感受、思考、表現 (1)他者や社会、自然に関する事物・事象に対して、共感的・内省的な態度で、それらを認知したり感受したりする生徒 (2)課題に対して、多角的に考察する態度や公正な態度で、粘り強く追究し、自分との関係に気付いたり、自らの考えを深める生徒 (3)自分の思いや考えを、協調的・主体的態度で、的確に表現できる生徒 【はぐくみたい生徒の姿】 変化の著しい社会の中でよりよく生きることができるよう、自ら新たな学びを進めることができ、社会の発展に貢献しようとする生徒 (1)習得した知識や技能、完成、見方や考え方を生かして、学校生活や社会で出会う新たな事物・事象に対して、学びを進めることができる生徒 (2)自己を取り巻く他者や社会、自然とのよりよい関係を築き、集団生活の向上を図ろうとする生徒 |
| 4 教育課程の構造 | 各教科における取組、各教科、総合的な学習の時間、人生ゼミの関連 総合的な学習の時間における取組（家庭公民領域、科学技術領域、言語芸術領域）、人生ゼミにおける取組。 |
| 5 研究評価 | 「社会性のはぐくみ」を六つの要素として各教室に掲示し意識付けを図った。その上で、生徒と教師が評価情報を共有し、自己評価や相互評価を行った（6要素カード）。「成長の足跡」を充実させ、生徒自身の社会性の伸張と課題を認識させた。 その他「活用力レポート」の開発を試みた。 |
| 1 研究主題 | 「自立して学ぶ生徒」を育てる教育課程の研究開発 －「意欲・自律・学びの質」を高める「基礎教科」「総合教科」の設定－（文部科学省研究開発学校） 2011年度から総務省「フューチャースクール推進事業」及び文部科学省「学びのイノベーション事業」の実証校となる。 |
| 2 研究主題設定の理由（背景） | (1)これまでの当校研究の経過 (2)社会が求めている教育の方向性から：キー・コンピテンシー、21世紀型スキル、ESD、教育基本法、自立、新学習指導要領、生きる力 |
| 3 育成すべき資質・能力(目ざす生徒の姿・人間像) | 大事にしたい学力 (1)意欲 (2)自律 (3)学びの質 目ざす生徒像 自立して学ぶ生徒 |
| 4 教育課程の構造 | 2010 「基礎教科」と「総合教科」を新たに設定して、教材と学習過程を工夫して指導することで、「自立して学ぶ生徒」を育てる。国語表現科、市民科、探究数学科、探究理科、創造音楽科、創造美術科、実践保健体育科、技術活用科、生活家庭科、英語コミュニケーション科、道徳、総合的な学習の時間 2011 「基礎教科」と「総合教科」を新たに設定して、教材と学習過程を工夫して指導することで、「自立して学ぶ生徒」を育てる。国語科、市民科、数学科、科学科、音楽科、美術科、保健体育科、技術科、家庭科、英語科、総合教科、じりつの時間、SMILEゼミ 2012 「基礎教科」と「総合教科」を新たに設定して、教材と学習過程を工夫して指導することで、「自立して学ぶ生徒」を育てる。持続発展科、国語科、市民科、数学科、科学科、音楽科、美術科、保健体育科、技術科、家庭科、英語科、じりつの時間、SMILEゼミ |
| 5 研究評価 | 教研式学習適応検査（全校生徒）、全国学力・学習状況調査（3年生）、各教科等における評価情報、生徒のアンケート、校内外の活動の様子をもとに、生徒の意欲、自律、学びの質の高まりを確認した。※「振り返りカード」「SMILEノート」「定期テストの振り返り」 |

（釜田作成）

2007年－2009年の研究期は、「大事にしたい学力」と「はぐくみたい生徒の姿」を設定した。「大事にしたい学力」として、活用力と社会性を挙げている。「はぐくみたい生徒の姿」に、自ら新たな学びを進め、社会の発展に貢献しようとする力を包含させている。教育課程の構造は、人生ゼミを位置付けた以外は、基本的に学習指導要領の趣旨に合致させた教育課程に再編成している。研究評価は、「社会性のはぐくみ」を6つの要素として各教室に掲示し、6

要素カードを用いた評価情報を集積し、適切な自己評価を促して、研究の評価としても活用している。

2010年－2012年の研究期は、目ざす生徒の姿を「自立して学ぶ生徒」と設定し、大事にしたい学力として、意欲、自律、学びの質の三つを挙げている。教育課程は、目ざす生徒の姿と大事にしたい学力をはぐくむため、毎年教育課程の構造を見直し、2012年には、「基礎教科」と「総合教科」、持続発展科、市民科、じりつの時間、SMILEゼミなど、特色ある科目を設定した。研究評価は、教研式学習適応検査（全校生徒）や全国学力・学習状況調査（3年生）などを行い、教育課程全体と各教科等における評価情報、生徒や保護者の声などを多面的・多角的に集積・分析した。

3. 1. 4 第4期

表4 知識基盤社会・グローバル化社会に対応した教育課程生成期（2013年－2015年）・開発期（2015年－2018年）

| | |
|---------------------------|---|
| 1 研究主題 | 知識基盤社会を主体的に生き抜く生徒の育成－情報や他者と適切に関わる力を視点として－ |
| 2 研究主題設定の理由（背景） | (1)これまでの当校の研究とのつながり (2)情報や他者と適切に関わるという視点 生徒の実態等 |
| 3 育成すべき資質・能力（目ざす生徒の姿・人間像） | 探究の過程 (1)課題設定 (2)情報収集 (3)整理・分析 (4)まとめ・表現 生徒の姿 情報や他者と適切に関わる姿 |
| 4 教育課程の構造 | 各教科等、持続発展科 各教科等において、探究の過程を取り入れた単元・題材を構想し、その過程でどのように情報や他者と関わることが生徒の学びに有効かを明らかにする。探究の各場面における情報や他者と適切に関わる生徒の姿を設定し、各教科等において授業実践を積み重ね、有効な手立てを明らかにする。 |
| 5 研究評価 | (1)評価規準・基準の作成と評価情報の共有 最終年次は、すべての教科に共通する探究の各場面における情報や他者と適切に関わる姿を設定した。評価情報は、評価規準・基準の作成（「ループリック」「決定にステップ」）、A評価・B評価を設定して教師と生徒が評価情報を共有した。 (2)各種調査 教研式学力調査（NRT）、全国学力学習状況調査、教研式学習適応性検査（AAI）、生徒の振り返り作文 (3)研究成果（有効であった研究内容） ①実生活や実社会に関わる事象を取り上げたこと ②探究の過程や実践の場、振り返りの場を位置付けたこと ③各教科共通の手立ての設定し、複数の教科で用いたこと (4)研究課題 ・「情報活用力」や「コミュニケーション力」を重視しながらも、グローバル社会で生きていく上で必要な様々な資質・能力を明確にし、教育課程とどのように結び付けて生徒を育成していくべきなのかを明確にすること ・他者との対話や協働を通して合理的・批判的に判断し、最適解を導き出すために、論争的で正解のない課題を学習活動の中に設定し、それを解決するための手立てを工夫すること |
| 1 研究主題 | 「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を育てる教育課程の研究開発（文部科学省研究開発学校第1年次） |
| 2 研究主題設定の理由（背景） | (1)これからの時代で求められる人材とは 高度情報社会、少子高齢社会、グローバル社会、成熟社会 (2)これまでの研究経緯 前研究の成果と課題を踏まえ「情報活用力」や「コミュニケーション力」を重視しながらも、様々な資質・能力を総合的に育成しなければならないという結論に至った。 |
| 3 育成すべき資質・能力（目ざす生徒の姿・人間像） | (1)情報統合力 (2)代替思考力 (3)企画創造力 (4)主体的実践力 (5)コミュニケーション力 (6)コラボレーション力 |
| 4 教育課程の構造 | (1)仮説：「グローバル人材育成科」を新設し、各教科と両輪でアビリティを育成する教育課程を編成することで、「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を育むことができる。 (2)教育課程 「グローバル人材育成科」 課題討論の時間、企画創造の時間、グローバルコミュニケーションの時間 |
| 5 研究評価 | 各教科と教育課程全体の評価を併用する。各教科は従来の観点別評価を行う。グローバル人材育成科は階層型ループリック評価、ポートフォリオの蓄積による評価を行う。教育課程全体の評価は、知識理解面の評価、6つのアビリティの評価を行う。その他、教研式学力調査（NRT、CRT）や教研式学習適応性検査（AAI）、生徒向け、保護者向けのアンケートを実施し、評価情報を集積し、教育課程の効果を測定する。 |

（釜田作成）

2013年－2015年の研究期は、目ざす生徒の姿を「情報や他者と適切に関わる姿」と設定し、四つの探究の過程を重視した。四つの探究の過程とは、課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現である。つまり、知識基盤社会において、情報や他者に適切にかかわるためには、四つの探究の過程を重視し、そこに研究の視点を当てた実践研究を

すべきであるという意図がうかがえる。教育課程の構造は、通常の教育課程に、「持続発展科」を設定し、特色ある教育課程を編成している。研究評価は、(1)評価規準・基準の作成と評価情報の共有、(2)各種調査（教研式学力調査（NRT）、全国学力学習状況調査等）、(3)研究成果（有効であった研究内容）の三つで実施した。

2015-2018年の研究期は、資質・能力として、(1)情報統合力、(2)代替思考力、(3)企画創造力、(4)主体的実践力、(5)コミュニケーション力、(6)コラボレーション力の六つを挙げ、教育課程を再編成した。教育課程内に、「グローバル人材育成科」を新設し、各教科と両輪でアビリティを育成しようとしている。そうすることで、「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を育むことができるという構造になっている。研究評価は、これまでの上越教育大学附属中学校の教育研究評価を参考にしながら、次のような多面的・多角的な評価を行うと準備を進めている。

<各教科における評価>

(1)従来の観点別評価（国語5観点、他4観点）

ルーブリックを用いた評価基準を設定し、A、B、Cの3段階評価を行う。

<グローバル人材育成科における評価>

(1)階層型ルーブリック評価

階層型ルーブリックを用いた評価基準を設定し、A、B、Cの3段階評価を行う（教師）。生徒の自己評価については、A評価の上にS評価を話し合いの上で設定させ、A評価を超える高い姿を自らめざすようにする。

(2)ポートフォリオの蓄積による評価

生徒の記述内容の変容、メタ認知の状況などを把握する。

<教育課程全体に関する評価>

(1)持続可能な社会のについての知識・理解を評価する（研究主題に関わる持続可能性の知識・理解についての評価）

何が問題になっているのか、何が原因になっているのかなど筆頭検査を行う。

(2)6つのアビリティが育成されているかどうかを評価する（研究主題に関わる持続可能性の能力・態度・活動についての評価）

研究主題にある「創造する」こと、「確立する」ことを「アビリティをあらゆる場面で発揮する」と捉え、全日を使って、パフォーマンス課題を行う。50分の活動と10分の振り返り活動を6サイクル実施し、振り返りではオープンクエスチョン（5W1H）の視点で活動内容を記載する。振り返りからどのようなスキルを記述したかを、対応表と照らし合わせ、アビリティ⁴⁾の発揮状況を評価する。

(3)教研式学力調査（NRT、CRT）教研式学習適応性検査（AAI）

新教育課程が学力に与える影響について考察する。

(4)生徒、保護者の教育課程に対する意識はどのようになっているか

学校評価による生徒・保護者の教育への意識調査を行い、これからの社会を生きる生徒にとって、提案する教育課程が効果的であると捉えているかどうかについて、分析する。

3. 2 現在の研究と今後の見通し

－「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を育てる教育課程の研究開発－

2016年2月現在、上越教育大学附属中学校は、6つのアビリティを各教科等とグローバル人材育成科で育成するため教育課程の開発研究に取り組んでいる。

教員集団が、これからの時代は高度情報社会、少子高齢化社会、グローバル社会、成熟社会であるという共通理解のもと、必要な資質・能力を6つ設定し、教育課程全体で育てようという、現代的な教育課題に正対した研究である。一方で、資質・能力はこのアビリティの6つでよいのか、その設定方法は妥当なのか、妥当だったのか、またその手続きは一般化可能なのかなど、まだまだ課題は山積している。今後の研究推進とその成果と課題の公表を待ちたい。

4 まとめと今後の課題

4. 1 附属中学校20年間の教育課程研究から見えること。

本研究の結果を、研究課題、資質・能力と教育課程、全体を通じての三つの視点から述べる。

4. 1. 1 研究課題設定の背景等

研究課題は、時代や社会の要請、学習指導要領、生徒の実態、前研究の成果と課題を受けて、設定している。特徴としては、常に時代や社会の要請と学習指導要領に変遷に着目しながら、目の前の子供たちの成長を第1に願いつつ研究課題や目ざす生徒の姿・人間像を設定していることが確認できた。

4. 1. 2 資質・能力と教育課程

「資質・能力（目ざす生徒の姿・人間像）」は、研究課題との関係で、明確に示している場合と目ざす生徒の姿・人間像に包含される形で示している。また、目ざす生徒の姿・人間像を設定した場合は各教科等、各学習場面で評価規準・基準を設定し、その度に評価活動を行っている。教育課程全体の評価については、生徒全員を対象にした評価、保護者評価、教員評価、共通抽出生を対象とした評価が確認された。いずれにしても、多面的・多角的な評価情報を集積し検討した上で、教育課程の評価を行っていることが確認された。

4. 1. 3 全体を通じて

研究の期間としては、教育課程の生成期・開発期と実践・充実期のサイクルで研究開発が行われている。通常は2～4年単位での研究期間を設定し教育課程研究に取り組んでいる。大幅な教育課程の再編成については、おおよそ生成期と開発期、あるいは充実期と5～7年ごとに教育課程の大きな節目が確認された。5～7年の周期は、教員の異動周期とも重なる。教員集団が一新される時期を迎え、新たな教育課程の開発が待たれる時期になり、必然的に時代や社会の要請、学習指導要領の変遷や見通しを踏まえた上で、在職している教員集団が新たな視点で教育課程の開発をしようとしていることが推測される。この経緯や開発までの足跡を明らかにすることを今後の研究課題としたい。

4. 3 今後の課題

今後の研究課題として、次の3点を挙げたい。

- (1)「資質・能力（目ざす生徒の姿、人間像等）」と各教科等、教育課程全体の評価方法の開発について研究の余地がある。これまでも、上越教育大学附属中学校では、様々な評価方法が開発され実践されてきたが、資質・能力をいつ、どこで、どのように評価をし、授業実践と教育課程の編成・開発に生かすのかが問われる。
- (2)6つのアビリティの内実を実践を通じて再吟味することが求められる。6つのアビリティにはESDが求める知識・理解、心情、態度が内包されている。それらが、いつどのように発揮され、評価の対象とするのかなど、今後の実践上の課題となる。また、ダイバシティーや多文化（異文化）コミュニケーションのトレーニングを具体的にどのように行い、どう評価するかなども課題といえる。
- (3)今後の研究の視点として、各学校における資質・能力の選定や評価方法の開発、カリキュラムマネジメントするための教員の力量形成、すなわちそのような研修が必要であるかなど、上越教育大学附属中学校の開発研究に寄せられる期待は大きい。

注

- 1) 文部科学省HP：OECDにおける「キー・コンピテンシー」について
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/002/001.htm（2016.2.14取得）
- 2) 文部科学省HP：「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」
－論点整理－【主なポイント】（平成26年3月31日取りまとめ）
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/06/03/1346335_01_1.pdf
（2016.2.14取得）
- 3) 文部科学省HP：同p.52：http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1346335_02.pdf（2016.2.14取得）
- 4) アビリティには、ESDで求められている7つの能力態度をすべて含んでいる。

参考文献

- ①安彦忠彦編「活用力を育てる授業の考え方と実践」図書文化、2008年6月
- ②安西祐一郎「教育が日本をひらくグローバル世紀への提言」慶應義塾大学出版会、2008
- ③研究代表者勝野頼彦「教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」2013
- ④釜田聡「中学校における各教科等と関連を図った「総合的な学習」についての意識調査－上越教育大学附属中学校教員へのアンケート調査から－」『上越教育大学研究紀要』上越教育大学VOL.25 NO.1, pp.243-254, 2005
- ⑤釜田聡「各教科等の関連を図った「総合的な学習」のカリキュラム開発の可能性と課題」（pp.178～194）
『日本学校教育学会創立20周年記念論文集学校教育の「理論知」と「実践知」』教育研究開発所（全289頁）、2008
- ⑥白水始「『学ぶ力』を身につけるための協調学習」埼玉教育 第5号 pp.7-10, 2014
- ⑦総務省「教育分野におけるICT利活用推進のための情報通信技術面に関するガイドライン（手引書）2014（中学校・特別支援学校編）」総務省 2014年4月

- ⑧多田孝志「共に創る対話力 グローバル時代の対話指導の考え方と方法」教育出版, 2009
- ⑨多田孝志「授業で育てる対話力 グローバル時代の『対話型授業』の創造」教育出版, 2011
- ⑩奈須正裕・久野弘幸・齊藤一弥編著「知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる コンピテンシー・バイスの授業づくり」ぎょうせい, 2014年

以下, 上越教育大学附属中学校の研究紀要等

- ⑪上越教育大学附属中学校「個の発想を生かした学習活動の多様化」図書文化, 1990
- ⑫上越教育大学附属中学校「21世紀の教育課程の開発Ⅰ」1995
- ⑬上越教育大学附属中学校「21世紀の教育課程の開発Ⅱ」1996
- ⑭上越教育大学附属中学校「21世紀の教育課程の開発Ⅲ」1997
- ⑮上越教育大学附属中学校「中学校 こうしてつくった総合学習」教育開発研究所 1998年5月
- ⑯上越教育大学附属中学校「自らの学びを総合化する生徒の育成 No.1」1999年5月
- ⑰上越教育大学附属中学校「自らの学びを総合化する生徒の育成 No.2」2000年9月
- ⑱上越教育大学附属中学校「自らの学びを総合化する生徒の育成 No.3」2001年9月
- ⑲上越教育大学附属中学校「自分を知り, 世界とのかかわりを深める教育の創造 Vol.1」2002年10月
- ⑳上越教育大学附属中学校「自分を知り, 世界とのかかわりを深める教育の創造 Vol.2」2003年10月
- ㉑上越教育大学附属中学校「総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した新たな教育課程の研究開発 Vol.1」2004年10月
- ㉒上越教育大学附属中学校「総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した新たな教育課程の研究開発 Vol.2」2005年10月
- ㉓上越教育大学附属中学校「総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した新たな教育課程の研究開発 Vol.3」2006年10月
- ㉔上越教育大学附属中学校「新たな単元開発への挑戦! 総合と教科が一体化した単元の魅力」東洋館出版社 2006年10月
- ㉕上越教育大学附属中学校「社会に広がる学びの創造 Vol.1」2007年10月
- ㉖上越教育大学附属中学校「社会に広がる学びの創造 Vol.2」2008年10月
- ㉗上越教育大学附属中学校「社会に広がる学びの創造 Vol.3」2009年10月
- ㉘上越教育大学附属中学校「自立して学ぶ生徒」を育てる教育課程の研究開発 Vol.1」2010年10月
- ㉙上越教育大学附属中学校「自立して学ぶ生徒」を育てる教育課程の研究開発 Vol.2」2011年10月
- ㉚上越教育大学附属中学校「自立して学ぶ生徒」を育てる教育課程の研究開発 Vol.3」2012年10月
- ㉛上越教育大学附属中学校「知識基盤社会を主体的に生き抜く生徒の育成vol.1」2013年10月
- ㉜上越教育大学附属中学校「知識基盤社会を主体的に生き抜く生徒の育成vol.2」2014年10月
- ㉝上越教育大学附属中学校「知識基盤社会を主体的に生き抜く生徒の育成vol.3」2015年10月

Students' quality and ability to independently survive in a knowledge-based society in relation to the curriculum

– Research and development at Joetsu University of Education Fuzoku Junior High School –

Shinya KOIDE* · Tomoya NIGORIKAWA* · Hirofumi NAKANO* · Satoshi KAMADA**

ABSTRACT

The present study aims to identify the characteristics of curriculum development at Joetsu University of Education Fuzoku Junior High School by systematically reviewing the history of curriculum development at that junior high school from the viewpoints of setting research tasks, the structures of “quality and ability” in relation to the curriculum and evaluation methods.

Consequently, the study has successfully identified the following three points as characteristics of the research conducted at the junior high school:

1. Research tasks are set in consideration of the demands of the times and society, the government curriculum guidelines, the actual conditions of students, and the results from and challenges for previous research.
2. “Quality and ability” are shown either clearly in relation to research tasks or are implied by the images of the kind of people that the students aim to become.
3. During the research period, research and development are conducted in a cycle consisting of curriculum generation/development and their practice/enhancement.

In terms of future research tasks, this study indicates room for research on the development of methods to evaluate “quality and ability” for each subject as well as the entire curriculum.